

＝ 第4号 ＝

発行日:2015年11月1日
編集:立命化友会事務局
編集責任者:金川義孝
〒525-8577
滋賀県草津市野路東1-1-1
立命館大学生命科学部事務室内
TEL.077-561-2658
FAX.077-561-2659
e-mail:kayukai@st.ritsumeai.ac.jp



立命化友会ニュース

生命科学部の 近況報告

生命科学部長
里見 潤



立命館大学は、本年四月には斬新な未来志向のコンセプトにもとづく「大阪いばらきキャンパス」を開設し、衣笠キャンパスから政策科学部が、びわこくさつキャンパスから経営学部が同キャンパスに移転しました。来年四月には総合心理学部も新設されます。また、国際化の課題に関しては、昨年九月に本学は文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援事業」に採択され、これまで以上に内実のある国際化を強力に推し進める取り組みが始まりつつあります。そして、現在、二〇二〇年の立命館学園を構想するR二〇二〇後半期計画の策定に向けて全学的な議論が活発に行われています。

このような状況の中で、二〇〇八年の開設から七年が経過した生命科学部は、学部および研究科の教育力および研究力を継続的に一層高めていくべく、現在、新たな展開について検討をしつつ、着手できる課題から解決のための取り組みを開始しています。

本年度、生命科学部は外部評価を受け、評価委員の先生方から高い評価をいただくことができました。これは初代学部長の谷口先生、前学部長の今中先生のリーダーシップのもとに、学部を立ち上げ軌道に乗せる過程で生じた幾多の困難を教職員が力を合わせて乗り越えてきたからこそと思っています。また同時に、評価委員の先生方からは「立命館大学生命科学部」の発展に期待するが故の温かくも厳しいご意見もいただきました。それらをしっかりと受け止め、早速、二〇一七年に予定しているカリキュラム改革にも反映させ、今後の学部改革に活かしていきたいと考えています。現在、カリキュラム改革に連動させるかたちで二〇一七年に応用化学科の入学者定員を二十五名増加させ生命系化学領域の充実・強化を図る方針を学部として決定し、その実現を目指しています。R二〇二〇後半期計画の中では、グローバル化の課題とともに

に大学院の一層の充実・強化の課題が生命科学部にとってきわめて重要になるため、現在、理工学部、情報理工学部、および薬学部とも連携をとりながら理工系大学院の改革について精力的に検討を進めています。

生命科学部では、教員組織の充実・強化も着実に進んでいます。本年四月には新たに三名の教授と六名の助教を迎えることができました。また、来年度も多くの教員を新たに迎える予定になっています。これらの先生方が、生命科学部に新たな息吹を吹き込み、今後の学部の教育力と研究力の向上に多大な貢献をしてくださるものと確信しています。

生命科学部の施設条件整備も大きく前進しています。学部の基幹施設となる新棟バイオリンク(規模:八階建、総床面積約一万平方メートル)が昨年度末に完成し、本年四月より本格的な施設の使用が開始されています。この新棟には、生命科学部のほばすべての教員の教員研究室(個人研究室)が設けられ、多くの卒業研究が入っています。また、九月には学部事務室がバイオリンクから連絡路で接続するリンクスクエア二階に設置され、従来よりも学部全体の施設機能性が高まり、学生、教員、職員間の相互のコミュニケーション

ションがよりいっそう活発かつ円滑になってきているように見受けられます。建物の随所に学生が快適に過ごし学べる空間が組み込まれており、学生たちは日々それらの空間を十分に活用しながら勉学に励んでいます。

さて、私の学部長としての任期も残り少なくなってきました。責任の重さを日々ひしひしと感じながら一年半を過ごしてきましたが、優秀な学生に恵まれ、優れた能力と可能性を備えた教職員とともに仕事ができていることに感謝しています。生命科学部には、生命科学部・薬学部誕生の源流である理工学部時代の化学科、あるいはそれよりも以前の専門学校当時から育まれ引き継がれてきていると思われる「学生をしっかりと育てつつ新たな創造に果敢に取り組み精神」が脈々と流れていると感じます。これからも、生命科学部の構成員が、力を合わせ、学部としての一体感を持った自由闊達な雰囲気大切にしながら、また、薬学部とも協力しながら、常に二十年、三十年先を見据えつつ素晴らしい学部を築き上げていってくださるものと信じ、期待しています。

最後になりますが、引き続き立命化友会の生命科学部および薬学部へのご支援をよろしくお願いたします。

薬学部の 近況報告

安定飛行まで
もう少し、
冷や汗の連続

薬学部長

今村 信孝



昨年は、薬学部の一期生が卒業して薬剤師国家試験を受験しましたが、余り芳しくない結果に終わったという残念な報告が始まり、二〇一五年春には新学科の創薬科学科を開設するという予告をさせて頂きました。薬剤師国家試験が急に難化したことを、昨年、報告しましたが、実は今年の国家試験問題は昨年以上に難しいものでした。

昨年の全国平均の合格率が浪人と新卒を合わせて六十一%、立命館は新卒だけで六十七%と満足のいかぬ結果でした。

今年こそと期待に胸ふくらませ、心待ちしたところではありました。薬剤師国家試験では合格基準正解率が定められているので、自己採点で合否が分かるシステムが構築されています。三月初めの国家試験後、予備校の自己採点システムを使った学生から知る知らせは、次々と不合格という判定で、この一年間の努力も一層の難化傾向で水泡と帰したかと落胆しました。全国規模の予備校では、多くの受験者の結果が集められ、全国平均合格率五十%台という速報が真実味を持って伝えられました。せめて全国平均の合格率を超えて欲しい、そんな淡い期待の中、余りの合格率の低さに厚労省が動くとの噂も耳に入ってきましたが、どの程度の恩恵をもたらすのか三月末の発表まで分かりませんでした。蓋を開けてみると、既卒、新卒合わせての全国平均合格率は六十三%、合格率の下降は下げ止まったとの報道に繋がりました。噂通りに厚労省が幾つかの難問を全員正解とする判断を下し、合格率を上げました。さて、我が立命館はと言いますと、既卒、新卒合わせた合格率が七十九.五%、国公立十七校を含む七十三大学の合格率の順位では全国九位(私大六位)、昨年度、不幸にして不合格に終わった卒業生が本当によく頑張ってくれて既卒合格率八十八.九%、全国一位でした。新卒が七十六.八%(全国三十位、私大十六位)と若干悔いが残るものの、伝統ある薬科大学と二期目で肩を並べられるほどの合格率になれたことは、教職員、学生が一丸となって努

力した結果であり、大変喜ばしいことと考えています。今年から一月中旬メ切りの出願者数も厚労省は同時に発表しています。合格率を上げるため学生を絞り込む私大が多く、今年は私大から一万五千を超える出願者がありながら、実際に受験したのは一万人を切っています。出願者ベースの合格率では、新卒七十六%の立命館は私大九位にまで順位を上げることとなります。出願者ベースで合格率八十%を超える私大は僅か四大学で、今後はこの高みを目指し、更なる努力を続けることとなります。

さて、薬学部教職員にとって、もう一つのこの春の関心事は創薬科学科の設置でした。薬学科と一緒に講義を受けさせるに相応しい、優秀な学力の学生を集められるかと不安を抱きながらの出発でした。残念ながら、広報不足で定員を満たすよりも学力優先で判断せざるを得ず、定員割れのスタートとなってしまいました。国の成長戦略で要と位置付けられている創薬、私大の薬剤師養成教育への偏重から今後人材不足が懸念される創薬、また、たった一つの新薬で全世界の患者を救おうといった大きな夢を抱ける創薬、とPRしたい点が山盛りな学科だけに残念でなりません。ただ、入学してきた一期生の学生は学力も勉学意欲も満足できるもので、薬学科同様にスタートは課題山積でも、やがて大きく飛び立てるものとご期待下さい。

昨年、定員三名で設置した四年制の薬学研究科博士課程の方は順調で、

二〇一五年春の入学者は五名、来春も定員を超える入学者が見込まれています。本学薬学科の学生の勉学意欲も旺盛で、定員百名の学部から他大学や生命科学研究所への進学を含めると、毎年四・五名の博士課程への進学者がおります。

就職については昨年、全く触れませんでした。ご安心ください。今のところ、薬剤師資格さえ取れば、どうにでもなる状況です。本学ホームページから薬学部の就職の特徴をみると、業種別進路決定状況では、流通商事やサービスといった分野に多くの学生が就職したことになっていきます。流通商事は薬局、サービスは病院を示すようで、本学キャリアと薬学部との業種分けがずれているように感じています。また、進路として「その他」の人数が多いこと、これは国家試験が不合格で資格が必要な就職先を辞退したことによるものです。国家試験で浪人した卒業生の就職も順調と聞いています。今年度の就職では、薬学部生が国家公務員の院卒分類で合格し、厚労省に内定したという嬉しいニュースも入って来ています。

二〇一五年春は悲喜こももも、冷や汗が収まる暇のない春でした。冷や汗の連続ではありましたが、確かな手ごたえを感じた年でもありました。生命科学部とも協調しながら、確実に歩んでいくことが、更なる飛躍、安定感ある薬学部へと繋がると考えています。今後とも温かなご指導、ご支援を、よろしくお願いいたします。

定年退職に

あたって

今中忠行

(平成二十年着任)



二〇〇八年四月に新設された「生命科学部」にお世話になってから七年が経過しました。今から思うとアツという間違ったようにも感じられます。その間、学部長・理事を経験させて頂いたことは、私学の特徴を実感する貴重な経験でもありました。その内容については以前本ニュースでも書いたのですが、ここでは繰り返しません。一つだけ強調しておきたいことがあります。それは毎年学部の活動を記録する「年報」を開始したことです。これは現在も続けられていますので、これから是非継続して頂きたいと願っています。

前任の京都大学では、博士課程の院生に博士号を授与するための基準がありました。ある年には四名の博士課程三年がいて論文を出すのに必死になりましたし、

研究費を得るため科研費の取得も結構大きな負担になっていました。つまり研究を楽しむよりも論文を発表するのが目的になってしまっていることもありました。そこで立命館大学では、研究を楽しみかつ世の中に貢献したいと考えて、ナノパブルによる琵琶湖の浄化などにも取り組みました。最近では、常温常圧下で安価に効率的に炭酸ガスと水から石油（灯油、軽油など）を化学合成する技術を世界で初めて開発しました（Chemistry Letters, 2015）。これは無尽蔵の資源を利用することであり、硫黄や窒素成分を含まないため、燃焼後もSOxやNOxが出ない環境に優しい技術です。また炭酸ガス（地球温暖化ガス）を消費するので、温暖化予防に貢献でき、完全なCarbon neutralでもあるわけです。結論的に言えば、この新燃料が火力発電に利用することにより、電気代が安価になります。そうなれば日本の製造業が国際競争力を高めることにもつながるでしょう。日本の将来は、少子化が進んでも明るくなることは間違いないと確信しています。

話が逸れてしまいました。この立命館大学で多くの同僚・仲間たち、学生たちと素晴らしい時を共有できたことが本当の幸せでもありました。皆様から感謝の気持ちを表したいと思います。有難うございました。

今中忠行先生の

ご定年退職にあたって

生物工学科教授

久保 幹



大学院時代、今中先生の講演を拝聴し、圧倒されたことは昨日のように鮮明に記憶しています。あの迫力のあるそして人を引き付ける強烈なプレゼンテーションは、当時若かった私だけでなく同期の仲間たちを魅了しました。

その後、ご縁があり今中先生の研究室でお世話になりました。醜酔工学を学ばれた今中先生は、当然、お酒をこよなく愛されて、「久保君、どや、一杯いかへん」とよく声をかけていただきました。楽し

い時間を共有させていただいたことは、貴重な財産となりました。

歯に衣を着せず本音で話される今中先生は、何をすることも直球勝負にこだわられていたように思います。「世界や！世界で勝負せなあかん」、「一流を目指してやるんや」などなど、何事にも前向きに挑戦されるお姿に、多くの学生・院生がポジティブマインドを肌で感じ、そして知らず知らずのうちに身につけていったと思います。

今中先生は、一流の研究を継続的に遂行され、紫綬褒章の受章など高く評価されてこられました。大阪大学、京都大学、そして最後の七年間は、立命館大学生命科学部で教育・研究にご尽力いただき、多くの学生・院生を育て、優秀な人材を多数輩出されました。また、立命館大学・生命科学部では、学部長を務めていただき、新しい風を吹き込まれました。心からお礼申し上げます。

最初の出会いから約三十年たった今、今中先生はますますエネルギーに満ち溢れられておられます。そして円熟味も加味されました。

「久保君、まだまだやるで！」と言われているお姿に接し、更なる刺激を受けております。今後とも、よろしくお願い申し上げます。

定年退職にあたって

北 泰行

(平成二十年着任)



立命館大学に生命科学部と滋賀県唯一

の薬学部が新設された平成二十年に阪大薬学部定年退職と共に初代薬学部長として着任した。当時、薬学部は四年制から六年制に移行した時であった。従来は四年間で薬剤師免許を取得し、薬局や医療系分野に就職したり、多くはさらに大学院に進学し専門的な研究に取り組んだ後、企業の研究部門やアカデミックな方向に進んでいた。その比率は大学により異なっていたが、六年制となって様相は一変した。薬剤師の受験資格が六年必須となり、大部分の私学薬学部は六年制にシフトし国立大の過半数と一部私立大に四年制を残す大変動の時代に突入していた。

薬学六年制は高度な資格が得られる薬学教育を行う大学という掛け声の下で多くの私学が薬学部定員増や設立に参入した。このような時期に立命館大学も薬学

部を新設すると聞き、最初は不安に思った。しかし、立命館はレベルの高い総合大学で、高度なバイオ研究を志向する生命科学部と同時に薬学部を新設し、両学部が強く連携する構想である点が他大学と大きく異なっていた。当時、日本薬学会で理事並びに化学系部会長等を務め、薬学部として次第に基礎研究を行い難くなってきた現状を憂っていた私にとって、立命館大学が今後の薬学部の在り方の一つを示せるのではないと思ひ、薬学部長を引き受けさせて頂いた。

着任当初は、予想以上の会議の多さに驚いたが、次第に研究室には生命科学部と薬学部の学生が入室し、その多くが大学院に進むので研究も進展し、立命館での生活は大変充実していた。これは、阪大から私と一緒に立命館に移った土肥助教(現薬学部准教授)と数名の博士取得者が次々とポスドクとして精力的に研究・教育を行ったお陰と感謝している。

しかし、当初ほぼ順調だった生命科学部と薬学部の連携も薬学部学生が高学年になるにつれ、薬剤師国家試験対策の重圧が大きくなり、その運営が次第に難しくなった。後任の両学部長のご苦労は想像するに余りある。その後、薬学部以前から切望していた四年制創薬科学科が創設され、本年度より新入生を迎えることができた。再度、新学科と生命科学部

との適切な連携を行い、高度な薬学教育だけでなく、先駆的な研究と両立する、一つの見本となる私学薬学部を目指して欲しいと願っている。

現在、私は立命館大学創薬科学研究センターで、薬学部の土肥研究室と連携しながら、任期制研究教員達と共に、金属反応剤を用いないで革新的なヨウ素反応剤による触媒的合成反応の確立と創薬への展開研究を続ける毎日である。

北泰行先生の

ご定年退職にあたって

創薬科学科准教授

土肥寿文

北泰行先生は、二〇一五年三月末をもって定年により、ご退職になりました。

先生は二〇〇八年三月に大阪大学大学院薬学研究科をご定年退職後、同年四月新設の本学薬学部の学部長として赴任されました。このように縁あつてお越しになり、薬学部の創設期の発展に深く関わりつつ、さらに様々な立場で本学のために尽力してこられました。精密合成化学研究室を七年間主宰された間、総合科学技術研究機構副機構長、グローバルイノベーション研究機構(RICRO) 幹事などの数々の学内の要職を勤められたことを、

皆さまご存知かと思ひます。先生は今も大変お元気で、活力があり(三〇代の私でも負けてしまう)、多くの方が「もう定年なのか」と驚かれています。北先生、これまで本当に有難うございました。私にとって、北先生は薬学・化学の師であり、学生時代からこれまで多くのことをご教授頂きました。大学教員として、教育と研究に専念する決意を与えていただいたのも先生であり、誠に感謝しております。本学での研究も軌道に乗ってきましたところのご定年に少々残念の感もありますが、先生の素晴らしい研究を通じて化学の夢体験を共有できたことを、研究室生一同、誇りに思ひます。特に、学生に対する指導には厳しい中にも温かみがあつて、思い出深いところです。研究室のPCには和気藹々と集うそのような写真がたくさん残っております。

なお、今春から北先生は総合科学研究機構の特別招聘教授として創薬科学研究センター長を務め、お変わりなく過ごされております。北先生、これからも私達に良い影響を与え続けて下さい。先生の創薬化学の本はたいへん人気のベストセラーで、これを学んだ本学学生が将来、創薬の場で活躍する日もそう遠くないかもしれません。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

定年退職に

あたって

池谷幸信

(平成二十年着任)



私は、薬学部が新設された二〇〇八年四月に立命館大学薬学部へ赴任しました。立命館大学において、特に印象に残っているのは、生命科学部・薬学部一体運営、薬草園設置、研究ができる新設薬学部ということでした。

思い起こすと、一九六八年当時、日本一入学金が安い大学ということで、生物学の理工学部を受験しました。入学金六万九千円を支払ったのですが、親の収入の関係で、地元大学に入学しました。縁あって本学の教員になった時は感慨深いものがありました。赴任当時は生・薬一体運営ということで、応用化学科や生物工学科の有機化学実験、分析化学実験を担当しました。本格的な教員経験がなかったもので、薬学部の先生方をはじめ、生命科学部の中村尚武先生、河口昭義先生、白石晴樹先生、小野文一朗先生に学

生指導について相談させていただき、ご親切な助言を賜ったことが昨日のこのようです。実習科目でいうと、生命科学部が十四クォーターで薬学部が十クォーターと、生命科学部学の指導時間の方が長いというのも生・薬一体運営ならではの事です。

勤め始めた時、薬学部創設一年目ということもあり、生薬標本室はあるが標本は一点もなし、敷地候補はあるが薬草園も薬草もないという状況でした。生薬標本や薬草に関しては、これまで勤めていた漢方メーカーの株式会社ツムラに相談し、漢方薬に使う生薬の標本とその基原植物を恵与してもらうことができました。薬草園と薬草園の温室建設に関しては、使用方法や管理面の調整があり、執行部の許可を得るまで四ヶ月ほどかかりました。薬草園が実際にできたのは、薬学部創設二年目の五月半ばになり、生薬学の授業における薬草園での薬草説明では、どの薬草も小さくて学生に申し訳なく思いました。当初は、薬草園を手伝う派遣の方もいなかったもので、上半期は雑草取りおじさんになっていました。植えては枯らす育成の難しい植物もありました。本学薬学部が創設される前から、全国に薬学部がいくつか新設されました。それらのほとんどが、薬剤師国家試験合格を目指す教育が中心で研究をあまりやらないと聞いていたので、本学も同様かと考えていました。それで、赴任前の設備

要求案では自分の使用予定の器具のみを申請しました。ところが、夏に今村先生から「卒研生もいるので、案を見直して欲しい」とのご連絡をいただき、慌てたのをよく覚えています。今も西澤先生を中心に、いくつか共同研究をやらせていただいております。立命館大学は、研究を非常に重要視している大学であるという印象です。

七年という短い期間でしたが、打てば響く学生達と、いろいろご助言を賜りました先生方に支えられて、無事定年退職することができました。誠にありがとうございました。

池谷幸信先生の

ご定年退職にあたって

薬学科教授

今村信孝

池谷幸信先生は二〇一五年三月末をもって、定年退職されました。池谷先生、薬学部発足以来十年間、本当にご苦労様でした。

先生は静岡薬科大学（現、静岡県立大学薬学部）修士課程を修了後、株式会社ツムラに入社され、商品開発研究所所長、研究本部副部長などを歴任された後、薬学部設置に伴う公募で、本学教授として二〇〇五年春にご着任されました。

先生のご専門は、生薬、漢方薬で、立命館は薬学部設置までこの分野との関わり

りが無く、ゼロからのスタートとなりました。生薬、漢方薬の教育では、生の薬用植物や、生薬、漢方薬の標本が必要です。ご着任頂いた十年前、立命館が準備できたのは、ほとんど何も植わっていない植物園と温室、そして空のガラス戸棚が入った標本室でした。先生は、お知り合いから植物を譲り受けては植え、草むしりも多くは先生ご自身が休日や夏休みの時間を使って行われました。国内最小の薬用植物園と先生が言われる植物園は、今ではすっかり整備され、また、標本室にも池谷先生の献身的な働きには、教員として頭が下がる思いで、また、学部長として心から感謝しています。

私のような門外漢からすると、難しい漢字名の漢方薬には、何種もの乾燥した植物が含まれ、薬効も普段は目にしない漢字が並び、随分と難しい学問分野のように思えます。それでも、先生の「褒めて伸ばす」教育にかかると、学生は嬉々として学び、とても難解に思われる起源植物と部位、生薬、漢方処方、そして主成分や薬効成分などをすらすらと答えられるようになりました。分かり易い講演は評判を生み、学内、学外で何回も講師を務めて頂きました。

現在、先生は本学の特任教授として活躍されています。若々しい風貌と柔らかな笑みを保たれ、益々ご活躍いただけているものと期待しています。

退職一年生

野間昭典

(平成二十年着任)



振り返ってみると私は四回の退職を経験していた。最近の傾向からしてこの数は特に多いものではない。ただ、今回の立命館大学・生命科学部からの退職はいよいよ本格的な退職で、もはや定職と呼べるような肩書きはなく、月給とは縁遠い生活パターンに陥った。退職後どんな生活になるのかいささか不安であった。蓄えが十分にあるわけでもなく、また、今すぐに子供たち一家と一緒に過ごしたいという緊急性もない。さらに、もはや何とできないほど体力、気力が衰えてしまったわけでもない。そんな行き当たりばったりであるが、やり残したことをもう少し完成に近づけたいという思いが、結果的にこのところの精神的な不安定に大変役立っているようである。昔、家を建てるときは床の間などの隠れたところの壁を一部塗り残しておいて、いつまでも作品を未完成であることにしていると聞いたことがあるが、なるほどと今更ながら納得である。

立命館大学に六十三歳で再就職して、

あつという間に7年が経過したが、この間多くの若者と新しい付き合いができた。どうやら、以前は医学畑にすっかりなじんで世界を狭くしていたようで、ここでは教育すべき内容(生理学)は毎年少しずつ詳しいものになったとしても、基本的に殆ど変更なく、何を教えるかは明白であった。これに対して、一般科学・技術を目指す立命館大学での教育研究は大いに違っていた。特に、バイオといえればそれは遺伝子を扱う分子生物学と考えられている現状で、「私の教育課題「体の機能の仕組みを定量的に解析する」を最初から期待した学生はいなかった。想定外の学生の反応に驚き、まさに手探り状態で私は教育に携わってきたというのが正直なところであり、その点で、学生諸君に対して、十分責任が果たせたとはいえずに思えない。ただ、卒業研究を通してじっくりこの分野の研究を説明していくと、学生たちの興味は日増しに高まり、最近では、多くの学生が自ら進んでより深く理解する努力をしているし、バイオシミュレーションで卒業研究を希望する人が飛躍的に増加した。また、いろいろな機会に工学領域の専門家からも興味を持って受け入れられてきている。

ここでは、自らの力不足はとりあえず忘れて、言い訳してみたことを述べてみる。いつか、この生命科学部ではどんな卒業生を送り出すことを目指しているのか、調べてみたことがあったが、「バイオと理数系自然科学の両方に見識のある卒業生を輩出する」という、まさに次世代科学技術を担う素晴らしい目標だと解った。

しかし、このタイトルには殆ど無限の広がりがあり、とても曖昧である。教育現場では専門的知識に精通した研究者の責任で、もっと具体的なレベルでこの教育テーマを議論し、掘り下げ、限られた学部・学科の人材を考慮して、しかも教育内容全体の整合性を満足できるように決断し、あわせて自らの教育研究で成果を具現化する努力をしなければいけない。

私のやり残した仕事とは、「数理時空間に生命活動を実現する」という目標を生命情報学の枠内における一つの教育課題として定着させることにある。この目標に向けて、もう少し、私にでも少しは役に立つことがあるような気がする。幸いこの間、皆様の暖かいご配慮をいただき、テクノコンプレックスに机を用意していただいているので、頭がぼけるまであと数年は学生さんと共にコンピュータプログラミングをせいでい楽しみながら、シミュレータをベースにした生命情報学教材(Heart)の開発に携わりたい。ただ、いわゆる老害を周囲に振りまくことだけは決してないよう心して。

野間昭典先生の御定年退職にあたって

生命情報学科教授

天野 晃

野間昭典先生は、京都大学医学研究科の教授として基礎医学の教育と研究に携わられたのち定年で御退職され、その後、二〇〇八年に本学に着任され、以来七年間にわたり生命科学部生命情報学科の教授と

して研究と教育にご尽力され、二〇一五年三月末をもって定年により、本学を御退職になりました。

野間先生は、元々日本で最初期にパッチクランプ法を始められ、重要な心筋細胞のイオンチャネルを発見されてこられました。あるところから、個々の機能要素を統合して、細胞の活動を全体として理解することが重要だと考えられ、細胞のモデルを構築する研究も進められるようになったとお聞きしました。

野間先生の講義や学生実験では、いつも学生に対して、自ら主体的に頭を使って物を考え、仕組みを理解することを大切にされていました。特に、簡単な数式として記述された要素がどのように組み合わせられて様々な機能が生じるかを、実際に計算機のプログラムとして実現することで説明され、さらに数式中の定数を変化させることでどのように機能が変化するかを、実際にプログラムを動かすことで理解するというステップをとっても大切にされていました。

このような姿勢は、七十歳で退職される時点でも如何なく発揮されており、一月に行われた最終講義でも、その時点で取り組まれていた最新の毛細血管モデルの解説をされ、まだまだ現役の研究者として、常に全力で頭を使った研究をされていることが、聴衆にも印象付けられるものでした。

今春から、野間先生は、立命館大学客員協力研究員として、テクノコンプレックスの研究室で、研究を継続されており、学部の授業や学生指導なども非常勤として継続してお願しております。

野間先生、これからもどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

林 昶先生を偲んで

能勢淳己

(昭和五十二年 化学科卒)



平成二十六年十一月二十七日、八十八歳の生涯を閉じられました。ここに深く哀悼の意を申し上げます。

さて、今回林先生「追悼の言葉」の依頼を化友会事務局から受けましたが、四年間の大学生活で卒研担当の教授との関わりはたった一年間という短い期間です。その中で林先生の業績や人となりを推し量ることは出来ませんので、先生の退官時に、我々立高会（高分子化学研究室卒研生と関係教職員で構成）会員に頂いた自伝『独り善がりの記』を振り返りました。林先生は、大正十五年六月二十五日兵庫県でお生まれになり、昭和十四年旧京都第一中学校に入学、さらに昭和十七年には海軍兵学校へ。そして、二十年八月海軍少尉として終戦を迎えられました。戦後は現京都大学農学部農芸化学科に進まれ、約五年間の企業勤務を経て、昭和三十五年本大学理工学部助教に、そし

て翌年教授として、平成四年三月定年で退官されるまで三十年余りの間高分子化学卒研生三百七十名強のご指導を頂きました。私事で恐縮ですが、昭和三十五年は小学校一年に入学した年でした。小学校から大学卒業までの十六年間の最後の一年間を林先生と過ごしました。

「学生の卒研配属を決めるとき、希望者が多くて困った。何故か人気がある。希望者の少ない研究室もあり、新任者としては辛い……」。「その年の卒研グループを一つにまとめよう。まずリーダーを育てよう。一人に何もかもやらすのは無理。実験・勉強会のリーダー、スポーツのリーダー、コンパや遊びのリーダーなど、それぞれ得意な学生を捜して分担させることにした。」（林先生著『独り善がりの記』より）

私達の世代も高分子研は希望が多く難関でした。一番の想い出というところウリンダやドライブかもしれません。遊ぶ合間に林先生は、いつも笑顔で実験や外書講読の指導をして頂きました。私達が高校生の時、大阪万博があり、本当に豊かな時代を過ごしたと思っています。先生の『独り善がりの記』を読んで、私達の前後の世代の立命館大学波瀾万丈の中での働きをおためて知る機会を得ました。

今年（平成二十七年）二月八日、「林先生を偲ぶ会」を開催したところ、全国各地から七〇名余りの卒研生達が集まってくれました。これもひとえに先生が立命館大学を愛され、学生を大切にされた賜だと思えます。最後にになりましたが、立高会は会員の皆

様に惜しまれながらも解散しました。林先生と立高会の名が未永く立命館大学に残るよう、立高会会員から徴収した会費を大学に寄付させて頂きました。その記念としてびわこ・くさつキャンパスの目抜き通りに先生のお名前と立高会という名が、陶板に記され残ることをお知らせします。

岡本勇三先生を偲んで

三上正勝

(昭和三十七年 化学科卒)



岡本勇三先生は二〇一四年（昨年）十二月二十七日ご逝去されました。卒業後は岡本先生と私とは仕事の繁忙と大学のめまぐるしい変革に惑わされて窓口を見失い、もつとも親しい方でありながらお目にかかる機会に恵まれず年賀状のやり取りだけになっていました。が同年（二〇一四）六月二日に先生の義兄であり会社の上司であった北村晴吉氏の告別式が京都教会で執り行われた際、先生のお姿が見えないのでご息女に消息をおたずねしたところずっと寝込んでおられて意

識もないとのこと、お見舞いもかなわず残念に思うとともにご無沙汰を申し訳なく思っていた矢先にご遺族からのご挨拶で先生の訃報に接することになりました。先生の実験室でのお振舞や辛辣で軽妙なお話にもうお目にかかれないうという現実に懐かしさと寂しさを覚えます。

岡本勇三先生は本学の制度改革があった昭和二十七年の化学科第一期生で立命館第一中学校以来の生粋の「立命マン」で建学の精神である独立・自由・改革を体現された方でした。

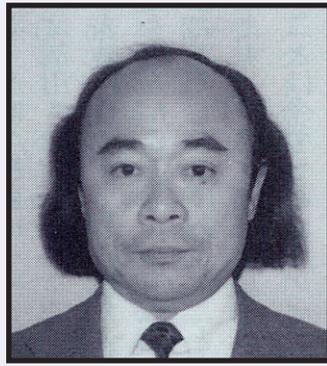
私が立命館大学理工学部化学科に入学したとき衣笠学舎の格納庫のような実験室と教官実験室の間を白い実験着と腰手ぬぐいをなびかせて颯爽と往来されていたお姿が懐かしく目に浮かびます。私は療養の傍ら通学という怠慢な学生生活を送っていましたので六十年安保のデモも他人事のようなスタンスでした。先生の口癖は「参ったなあ」でした。この言葉の中には研究活動・教職員・社会情勢に対して常に問題意識をもって真剣に当たる先生のお人柄が出た一語でしょう。当時の杉田研究室には企業から派遣された川島・西田の諸先輩がおられフリース反応を軸にした合成の討論やサンプルの分析・同定を当時導入のガスクロ、¹³C-NMRの解析などを教えていただきました。私は杉田教室で杉田嘉一郎教授と岡本勇三先生のご指導を通じて技術屋生活は無事勤め上げることができたことを感謝申し上げます。ここに改めて先生のご冥福をお祈りいたします。

名物教授・

山本善史先生を偲んで

袋布昌幹

(平成三年 化学科卒)



化学科の名物教授である山本善史先生が七月十一日に逝去された。ここ数年は山本先生の特徴的な字体ではなく、ご家族の代筆によるお便りが届くことが多かったのだが、突然の訃報に驚いている。

山本先生といえば、誰もが「電池の山善先生」と言うほど電池分野で多くの業績を遺され、多くの卒業生を電池メーカーに輩出してこられた。その業績を電子ジャーナルで調べてみると、五十年以上に発表された「溶融塩含浸法により製造した焼結式アルカリ蓄電池陽極板」(工業化学雑誌、VOL. 65, 10-15 (1962))にまでさかのぼることができる。その論文は日東電気工業(株)(現在の日東電工(株))との共著でまとめられており、すでにその当時から企業

との連携で実際の電池の課題に取り組んでおられた姿勢が見て取れる。

私の山本先生との初めての出会いは三回生の無機工業化学の講義であったろうか。非常にリアルな話題を、あの独特な話術で展開される先生の授業に惹かれて、私は一九九〇年に山本先生の卒研を志望するに至った。私は学部で卒業して外部の大学院に進学する道を選んだのだが、そのような私に対しても山本先生は常に気を遣ってくださり、学位取得が難航しているときには「もつと論文を書かねば」と励まし、結婚式の際にはわざわざ富山までお越し頂き祝辞を賜ることができた。また二〇〇六年に先生が「みんなの健康―食品、化学の基礎知識」を執筆された際には電話にていろいろ意見交換をさせて頂いたことを今でも覚えている。

現在富山の地で教職に就き、産学連携で現場指向の研究をドライブしている自分を振り返ると、わずかな期間ではあったものの山本先生のお人柄やお考えに触れたことが大きな影響を受けていることを実感する。同じような思いをもつ校友の方々もたくさんおられるものと思うが、もう山本先生のような「名物教授」は現れないのかも知れない。先生の薫陶を受けたものたちが社会に貢献できることで少しでも恩返しできればと考えている。

心より先生のご冥福をお祈りいたします。

金曜日より

立命館大学

びわこ・くさつ

キャンパス(BKC)を

卒業して二十年

山本俊哉

(平成五年 化学科卒)

本題に入る前に、まず私が、会員だよりに執筆させて頂く経緯からご紹介いたします。本年の四月十二日に研究室の一年先輩であります目片秀明氏より、立命化友会釣り天狗クラブにお誘いを受け、須磨海浜公園で海釣りをし、そのあと、バーベキューといった有意義な休日を過ごしました。その際に私の恩師であります、立木隆先生、当時、分析化学で何かとお世話になった白石先生と久しぶりに約二十年前の懐かしいお話で盛り上がりました。立命化友会ニュー編集責任者の金川氏も当日参加されており、その場で会員だよりの執筆のご推薦を頂きました。

今回の内容を考えた時に、今年で、修士課程を卒業して、二十年になることを思い出したので。私は、一九八九年、昭和から平成へ年号が変わった年に理工学部に入學し、学部生の四年間と修士課程の一年を衣笠キャンパスで、そして、一九九四年には新しくBKCに舞台を移し、修士課程の二年目をBKCで過ごし一九九五年に卒業しました。移転は立木先生を中心に機材、

薬品の搬入搬出など研究室総動員で行いました。一九九四年から一九九五年は個人的には草津での下宿探し、就職活動と研究の両立に移転の準備が重なり、タイトな一年間でした。

その後、二十年、BKCおよびその周辺も様変わりしています。当時、JR南草津駅もその年の九月にオープンしたものの、周りには何もありませんでした。キャンパスも当時は理工学部のみでした。最近、BKCにお伺いする機会がありました。BKC、その周辺もずいぶん発展したように感じました。

そして、立命館大学も、私が卒業して以降、一〇〇周年を迎えられ、アジア太平洋大学開校、生命科学部、薬学部の開設、そして本年、大阪いばらきキャンパスが開設され、この文面で書ききれないほど数々の発展を遂げられています。これからも立命館大学の発展と卒業生の方々のご活躍を一卒業生として、期待いたしております。

最後に、立命化友会の釣り天狗クラブが本年十一月二十二日に予定しておりますので卒業生の皆様のご参加よろしくお願いいたします。



釣り天狗クラブにて
(右から5番目山本氏)

全員だより

防災・減災に向けて

芳中奈生

(平成二十五年)

生命医科学科卒)



生命科学部生命医科学科を卒業し、メーカーの品質管理として徳島工場で働いて三年目になります。大学時代には専攻を活かして、子どもたちに身近なものを使って科学実験を教えるライフサイエンス研究会に所属しておりました。研究会所属中に東日本大震災が発生。被災地でライフサイエンス研究会の活動を行うことを企画し、大学のサポートを受けて現地に足を運びました。社会人になってからは日々の仕事や東北との距離を理由に行動を起こせませんでした。が、昨年十月、大学が企画した東北応援ツアーに参加することができました。東北では、まだまだ復興の進んでいない様子を目の当たりにすると共に、復興に取り組む校友の話や聞き、被災地へ思いがこれまで以上に強くなりました。その後、震災関係の情報収集や情報発信を行なう中で、震災を経験した大学生の話やイベントが開催されることを知りました。それが「ダッシュ隊徳島」との出会いでした。

東日本大震災の教訓を南海トラフ巨大地震に活かせるように子どもたちに防災について考えるきっかけづくりを行っています。その思いに共感した私はダッシュ隊の一員として二〇一五年八月に南三陸の子どもたちと徳島の子どもたちが防災について考える四泊五日のプロジェクトの企画運営に携わりました。このプロジェクトは東北の子どもたちを徳島に招待し、海遊びや阿波踊りを通して徳島の子どもたちと交流し夏の思い出づくりをしながら、東北と徳島の子どもたちの混合チームで毎日ミーティングを重ね、最後にホールで一般の方々に向けて子どもたちが考えた防災アイデアを発表するイベント「EENS防災」を開催するというものです。これらの運営資金は全て寄付や街頭募金で集めたお金で行っています。今回のプロジェクトで徳島の子どもたちが同じ年代でつらい思いをした子たちの話を聞ける貴重な機会となったのはもちろんですが、東北の子どもたちにも気づきがあったようでした。中には当時幼稚園だったので覚えていないという子どももいました。そこで震災当時小学校高学年から中学・高校生だった子たちは自分たちがどれだけ貴重な存在であるかを感じとり、自分たちが伝えていかないと。そんな風にしてほしい。そんな風に話してくれた子もいました。最後には「徳島のみんなに同じ経験をしてほしい」東北



ダッシュ隊徳島東北と徳島子ども学
びプロジェクト

の子どもから聞かれたその言葉に胸が熱くなりしました。

一人ひとりの力は本当に微力でちっぽけです。でも集まれば大きなことができるし新しい気づきがある、そんなことを感じたいお盆休みでした。二〇一一年三月十一日、あの日のことを何年経っても忘れないために、継承していけるように、これからも身近にできることから少しずつ取り組んで行こうと思います。

全員だより

震災を超えて

藤田恭子

(平成二十五年)

生命医科学科卒)



二〇一四年六月、東日本大震災から約三年後、私は初めて被災地を訪れた。岩手県上閉伊郡大槌町は三陸海岸に面しており震災時には津波の被害を大きく受けた。会社の被災地復興支援プロジェクトで訪れたが、震災から三年と思えないほどの爪痕が残っており大きな衝撃を受けた。

道プロジェクト」に参加させていただいた。花道プロジェクトは大槌町の方々とボランティアの方々で発足した「大槌町をバスケットボールを通じて復興支援・町おこしする企画」だ。その中心メンバーに広島県福山市に住む一人の女性がいた。彼女は震災時、車で片道十四時間かけ大槌町に度々足を運び、復興支援のためにできることを考え大会の中心メンバーとなった。私たちが地元の方と間違えるほど大槌町の方々と親しく心を通わせていた。

会場に行くとき自分が目にした被災地の光景が信じられないほど活気に溢れていた。スタッフ席では生き生きと大会を取り仕切る彼女の姿も見られた。驚くことに東京など遠方から参加するチームもあり、参加チームは二十を超えていた。

私はこの大会で、人の力と繋がりやの強さを感じた。一人の女性が残りの中、遠方から足を運んだその勇気は、今まで知りえなかった人々を繋げてくれた。その繋がりは一人一人の小さな勇気が集まることで拡大し沢山の奇跡を起こしている。

震災から四年半が経過した今、私たちの震災の記憶は薄れつつある。心のどこかで、もう元通りの生活をしているだろうという気持ちがあるのではないか。

それは大きな間違いだ。私たちが思う以上に復興には時間がかかり、現地の方々の心の傷は癒えていない。その中で、必死に戦い前向きに活動を続ける人々に会いに行くことが私たちにできる精一杯の支援なのだと感じる。

私も大槌の方々との関係を絶やさぬよう、時間に流されず足を運びたいと思う。

新任の先生から一言

■北村 佳久先生
きたむら やしひさ



本年四月より薬学部教授として着任しました。専門分野は、中枢薬理学、神経変性疾患、神経進化再生で、アルツハイマー病・パーキンソン病の新規治療薬の開発を目指して、患者さんの剖検脳、実験動物の脳を用いて研究しております。立命館大学の発展に貢献できますよう教育・研究に精進致す所存です。皆様のご指導・ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

- 略歴**
- 一九八三年 広島大学医学部総合薬学科卒業。
 - 一九八七年 北海道大学大学院薬学研究科博士後期課程中退。
 - 一九八八年 北海道大学薬学部助手。
 - 一九九四年 京都薬科大学助教・准教授。
 - 二〇一五年 本学薬学部創薬科学科教授。

■長澤 裕先生
ながさわ ゆたか



本年度四月より生命科学部教授として着任しました。専門分野は物理化学、とくに光化学を中心に、レーザーを使った時間分解分光実験を行っています。溶液中の単純な化学反応過程から、植物の光合成に関連した複雑な光捕集・電子移動過程まで、研究対象です。パルスレーザーにより化学反応を誘起し、分子構造がどのように変化していくかを観測しています。

- 略歴**
- 一九九一年 早稲田大学大学院理工学研究科応用化学専攻修了。
 - 一九九四年 総合研究大学院大学構造分子科学専攻修了、博士(理学)。
 - 同年 日本学術振興会 海外特別研究員(シカゴ大学)。
 - 一九九七年 大阪大学 大学院基礎工学研究科 助手。
 - 二〇〇三年 大阪大学 大学院基礎工学研究科 助教授(二〇〇七年准教授)。
 - 二〇一五年 本学生命科学部応用化学科教授。

■松村 浩由先生
まつむら ひろよし



本年四月より生命科学部教授として着任いたしました。専門分野は、構造生物学で、光合成生物の二酸化炭素固定に関わるタンパク質、ならびに病気や感染症に関わるタンパク質の「働き」「構造」「動き」について研究しています。本学の教育・研究活動に貢献できますよう精一杯努めてまいりたく存じます。ご指導・ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

- 略歴**
- 一九九五年 大阪大学工学部卒業。
 - 二〇〇〇年 大阪大学大学院工学研究科修了、博士(工学)、同年 大阪大学大学院工学研究科助手(助教)。
 - 二〇〇八年 大阪大学大学院工学研究科准教授。
 - 二〇一五年 本学生命科学部生物工学科教授。

■井之上 浩一先生
いのうえ こういち



本年四月より薬学部准教授として着任いたしました。専門分野は、分析化学及び食品衛生化学です。理化学的分析手法を用いて、臨床分野(認知症、生活習慣病、がんなど)や食品衛生分野での課題を解決すべく、技術革新を目指しています。薬学部の発展に貢献できますよう教育・研究に精進致す所存です。皆様のご指導・ご鞭撻のほど、宜しくお願い致します。

- 略歴**
- 二〇〇〇年 星薬科大学大学院薬学研究科博士課程後期中退。
 - 二〇〇一年 星薬科大学助手。
 - 二〇〇五年 米國ペンシルバニア大学博士研究員。
 - 二〇〇七年 金城学院大学薬学部 助教。
 - 二〇一二年 静岡県立大学薬学部 講師。
 - 二〇一五年 本学薬学部薬学科准教授。

■ 武田 陽一先生
たけだ よういち



本年四月に生命科学部准教授として着任いたしました。専門分野は糖質化学、糖鎖生物学です。本学では主に有機合成により構築した糖鎖やその誘導体を用いて糖タンパク質や糖脂質の機能を明らかにしていきたいと考えております。本学発展のため、教学・研究に精進する所存ですので、立命化友会会員の皆様のお力添えをいただきますようお願い申し上げます。

略歴
二〇〇五年 東京理科大学大学院基礎工学研究科博士後期課程修了。博士（工学）。その後、（独）科学技術振興機構 SORST 研究員（北九州市立大学）、（独）理化学研究所協力研究員等を経て、二〇一〇年（独）科学技術振興機構 ERATO 伊藤プロジェクトグループリーダー。
二〇一五年 本学生命科学部生物工学科准教授。

■ 深尾 陽一朗先生
ふかお よういちろう



本年四月より生命科学部准教授として着任しました。専門分野は生化学・分子生物学で、ミネラル欠乏などの不良環境で生育する植物のストレス耐性機構を分子レベルで研究をしています。本学ではこれまでの研究活動で得た知識や技術を学生に伝えながら、自身の研究を発展していきたいと考えています。どうぞよろしくお願いたします。

略歴
二〇〇三年三月 総合研究大学院大学博士課程修了博士（理学）。
二〇〇三年四月 京都大学大学院博士研究員。
二〇〇四年四月 同上 日本学術振興会特別研究員。
二〇〇六年一月 奈良先端科学技術大学院大学。バイオサイエンス研究科 特任助手。
二〇一〇年四月 同上 特任准教授。
二〇一五年四月 本学生命科学部生命情報学科准教授。

■ 田中 淳皓先生
たなか あつひろ



本年四月より生命科学部応用化学科助教として着任いたしました。専門分野は触媒・光触媒化学で、主に新規可視光応答型光触媒の設計・創成と環境保全およびエネルギー変換への展開について研究をしております。本学の発展に寄与できますよう、教育・研究に精一杯取り組みたいと考えております。皆様のご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願申し上げます。

略歴
二〇一三年四月 日本学術振興会特別研究員DC2（近畿大学）。
二〇一四年三月 近畿大学大学院総合理工学研究科博士後期課程修了、博士（工学）。
二〇一四年四月 日本学術振興会特別研究員PD（京都大学）。
二〇一五年四月 本学生命科学部応用化学科助教。

■ 戸部 隆太先生
とべ りゅうた



本年度四月より生命科学部助教として着任致しました。これまで、アミノ酸代謝、特にセレノシステインの代謝について研究してまいりました。初めての教育現場で、戸惑うことも多いですが、日々、楽しんで精一杯頑張っていこうと思います。どうぞ宜しくお願い致します。

略歴
二〇〇四年 東北大学農学部卒業。
二〇〇六年 東北大学農学研究科修士課程修了。
二〇〇九年 京都大学大学院農学研究科博士後期課程修了（農学博士）。
二〇〇九年 博士研究員（米国立衛生研究所）。
二〇一五年 本学生命科学部生物工学科助教。



新任の先生から一言

■ 杉田 昌岳 先生
すぎた まさたけ



本年四月より生命科学部助教として着任致しました。専門分野は生物物理学であり、計算機上で生体高分子の物性を予測するための方法論の開発や、開発した方法のEPR/ESRスクリーニングへの応用を中心に研究を行っております。本学では学生達と協力しながら沢山の研究成果を発信していきたいと考えております。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

略歴
二〇一四年三月 立命館大学理工学研究科博士課程後期課程終了。
博士（理学）。
二〇一四年四月 立命館大学総合科学技術研究機構 専門研究員。
二〇一五年四月 本学生命科学部生命情報学科助教。

■ 姫野 友紀子 先生
ひめの ゆきこ



本年四月より生命科学部助教として着任いたしました。専門分野は心臓生理学・生体シミュレーションです。心臓・循環に関する数理モデルを作成し、作成したモデルを用いて生体機能を明らかにする研究を行っています。本学では研究に加えて、教育に精一杯取り組んで参りたいと存じます。皆様のご指導ご鞭撻の程、どうぞよろしくお願ひ致します。

略歴
二〇〇八年 京都大学大学院医学研究科修士・博士課程生理系修了、博士（医学）。
二〇〇八年 京都大学附属病院糖尿病学内科、博士研究員。
二〇一二年 日本学術振興会特別研究員（立命館大学）。
二〇一五年 本学生命科学部生命情報学科助教。

■ 毛利 蔵人 先生
もうり くらと



本年四月に生命科学部に助教として着任いたしました。専門分野は細胞・発生生物学です。細胞性粘菌というモデル生物を用いての発生生物学と数理生物学やシステムバイオロジーを融合した研究を行なっていきたいと考えています。本学の研究、教育の発展に貢献できるよう努力して参りますので、皆様何卒よろしくお願ひ申し上げます。

略歴
二〇〇一年 千葉大学大学院自然科学研究科博士後期課程終了。博士（理学）。
二〇〇一年 エモリー大学（アメリカ合衆国）医学部病理学科、研究員。
二〇〇四年 理研、発生再生科学総合研究センター、研究員。
二〇〇五年 京都大学大学院理学研究、研究員。
二〇一〇年 筑波大学生命環境系、助教。
二〇一五年 本学生命科学部生命情報学科助教。

■ 奥山 哲矢 先生
おくやま てつや



本年四月より生命科学部生命医科学科の助教として着任いたしました。専門分野は分子生物学で、病気や老化に関連する遺伝子の発現の制御メカニズムの全容解明を推進したいと考えております。本学の教育・研究の発展に貢献できるよう精一杯努力したいと思っておりますので、皆様のご指導、ご鞭撻を賜りたく存じます。どうぞ宜しくお願ひ申し上げます。

略歴
二〇一一年 京都大学大学院生命科学研究科統合生命科学専攻修了、博士（生命科学）。
二〇一一年 立命館大学 R-GIRO 博士研究員。
二〇一三年 立命館大学理工学研究科産学連携博士研究員。
二〇一四年 立命館大学 研究補助員。
二〇一五年 本学生命科学部生命医科学科助教。

■ 高坂 和芳先生
こうさか かずよし



本年四月より生命科学部助教として着任しました。専門分野は細胞生物学、内分泌学です。着任後はマウスの行動解析など個体単位での評価系樹立に取り組んでおり、薬やホルモンと行動との因果を繋げればと思います。本学の研究・教育に貢献できるよう精一杯精進したいと存じますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

■ 檜垣 彰吾先生
ひがき しょうご



本年四月より薬学部助教として着任いたしました。専門分野は繁殖生物学で、特に魚類を用いて*in vivo*と*in vitro*における配偶子形成に関する研究を行っています。薬学部の教育・研究の発展に貢献できるよう、精一杯取り組んでまいります。皆様のご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

■ 木村 修平先生
きむら しゅうへい



二〇一四年度より生命科学部の英語教員に着任しました木村修平です。専門分野はICT（情報通信技術）の高等英語教育への導入と活用です。両者は現代の知的インフラと言えます。生命科学部・薬学部で展開中のプロジェクト発信型英語プログラムを通じて両者の融合について教育実践と研究を進めていく所存です。よろしくお願い申し上げます。

■ 近藤 雪絵先生
こんどう ゆきえ



本年度四月より薬学部の任期制講師（英語）に着任しました。専門分野はプロジェクト発信型英語プログラムにおける学生主導の授業運営とウェブ上のテキストのディスコース分析です。薬学部・生命科学部の学生が自分達で率先してプロジェクトを行い、成果を発信できるよう、影から支える指導と研究に力を尽くします。どうぞよろしくお願い申し上げます。

略歴

- 二〇〇二年 京都大学薬学部卒業、同大学院理学研究科進学。
- 二〇〇八年 同博士課程中退、大阪大学医学部三年次編入。
- 二〇一一年 京都大学博士（理学）。
- 二〇一二年～二〇一五年三月 勤務医。
- 二〇一五年四月 本学生命科学部生命医科学科助教。

略歴

- 二〇〇五年 北里大学獣医畜産学部獣医学科卒業。
- 二〇〇九年 北海道大学大学院獣医学研究科単位修得退学。
- 二〇一〇年 鳥取大学農学部助教。
- 二〇一二年 立命館グローバル・イノベーション研究機構 ポストドクトラルフェロー。
- 二〇一三年 同上助教。
- 二〇一五年 本学薬学部創薬科学科助教。

略歴

- 二〇〇三年五月 ミシガン州立大学社会科学部社会学科、卒業。
- 二〇〇六年三月 立命館大学大学院言語教育情報研究科、修了。
- 二〇一〇年四月 本学外国語嘱託講師。
- 二〇一四年 本学生命科学部生命情報学科学科准教授。

略歴

- 二〇〇八年三月 立命館大学言語教育情報研究科修了。
- 二〇一〇年四月 立命館大学非常勤講師。
- 二〇一一年四月 立命館大学外国語嘱託講師。
- 二〇一五年四月 本学薬学部任期制講師。

企画運営委員会報告

委員長 伴野 清

(昭和四十二年化学科卒)

皆様方の交流と親睦を図るための各種企画のご案内並びに運営状況について、報告させていただきます。

今年度も幹事の方々にお世話いただき「ゴルフ・懇親会」、「ハイキング」、「釣り天狗クラブ」および「温泉研究会」の各活動が繰り広げられ、恩師の先生方、先輩方、同胞、ご家族、友人との交流を楽しむ絶好の機会になりました。

今後、会員の皆様も益々増えていくと思っておりますので、皆様方のご協力をいただきながら、より一層充実した企画運営を続けてまいります。

それぞれの開催案内は、引き続き、事務局からお送りしておりますので、参加ご希望の方は、ご家族同伴も大歓迎いたしますので、事務局までお気軽にご一報下さい。

「企画運営委員会の開催」

平成二十七年一月二十五日(日) 京都タワーホテルにおいて、これまでの総括と今後の活動について打ち合わせを行い、当面、現行の企画運営テーマを柔軟的に運営していくことを確認しました。

平成二十七年六月二十八日(日) 朱雀キャンパスにおいて、本年度実施予定の企画運営テーマについて、意見交流を行いました。

第三十三回 ゴルフ懇親会

平成二十六年十月二十二日(水)

三上正勝氏・西村定氏にお世話いただき、超大型台風の過ぎ去った爽やかな秋空のもと、東城陽ゴルフ倶楽部で開催されました。十一名の参加者は、日頃の運動不足が解消され、楽しく思い切りプレーできたようです。永井博氏が優勝されました。おめでとうございます。



第二十九回 ハイキング

平成二十六年十一月二十一日(金)

東正弘氏と木全豊和氏に幹事をお願いし、絶好のハイキング日和に恵まれた、「箕面大滝から皿池公園まで」のコースにチャレンジしました。

箕面大滝の政の茶屋園地・箕面ビジネスセンター、勝尾寺、皿池公園までの結構きつい箇所もあるコースでした。参加者十名、打ち上げ親睦会を行い、大いに盛り上がりました。



温泉研究会・第四回総会

平成二十六年十一月二十九日(三十日)

和歌山県・竜神温泉の季楽里で開催され、参加された十二名の皆様は、共に高野山周辺の散策をも含めて見聞を新たにすることができ、有意義な日となりました。

温泉を愛する皆様方のご参加を心からお待ちしています。幹事役をさせていただきましたのは、奥野年秀氏です。



第三十四回 ゴルフ懇親会

平成二十七年三月二十五日(水)

幹事の三上正勝氏・西村定氏にお世話いただき、京都・宇治カントリークラブにおいて開催されました。当日は、寒気団の影響で、寒くなりましたが、十三名と多くの方に

参加いただき、和気あいあい親交を暖めることができました。競技方法は新ペリア方式で行い、西村定氏が優勝されました。おめでとうございませう。



第五回 釣り天狗クラブ

平成二十七年四月五日(日)

目片秀明氏のお世話により、「神戸市立須磨海づり公園」にて、魚釣りとバーベキューの楽しいひと時を過ごしました。当日はあいにくの雨で、戦果ももう一つでしたが、次回(十一月二十二日予定)こそはと、皆様張り切っておられます。釣りの経験なくても、準備はまったく不要です。釣りとバーベキューを楽しむ日に、皆様・ご家族様、お気軽にご参加ください。

温泉研究会・第七回幹事会

平成二十七年四月二十三日(二十四日)

宇多野ユースホテルで奥野年秀氏のお世話により、開催されました。本年度は、化友会幹事の杉浦静氏から、湯めぐり会の旅と言うお話で、話題提供をいただきました。懇親会では、皆様ゆっくりくつろいでいただきました。

第三十回 ハイキング

平成二十七年四月二十六日(日)

木全豊和氏にお世話いただき、参加者八名が、山桜を見ながらの柳生街道・滝坂の道コースを散策しました。

コースは、近鉄奈良〜飛火野〜滝坂の道〜地獄谷〜峠の茶屋〜円成寺になりました。結構きつい箇所もありましたが、全員無事に完歩することができました。疲れは懇親会で吹き飛んだようです。



物故者

平成26年10月1日から平成27年9月30日の間に、ご逝去の連絡を頂いた方々です。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

- 林 暁 (旧教員)
- 若狭 安男 (昭18年卒)
- 阿南 至徳 (昭20年卒)
- 桑田 昌治 (昭22年卒)
- 中谷 博 (昭22年卒)
- 山本 潤 (昭22年卒)
- 金沢 邦夫 (昭22年卒)
- 新井詳一郎 (昭23年卒)
- 太田 博三 (昭24年卒)
- 今達 緯治 (昭24年卒)
- 後藤 昭二 (昭25年卒)
- 植村 敏男 (昭26年卒)
- 富士原正義 (昭26年卒)
- 松宮 進 (昭27年卒)
- 吉田 治美 (昭27年卒)
- 五十嵐昌男 (昭27年卒)
- 岡本 勇三 (昭27年卒)
- 村尾 富 (昭27年卒)
- 段 勝 (昭28年卒)
- 佐藤 公男 (昭28年卒)
- 天方 宏 (昭28年卒)
- 野々村和郎 (昭28年卒)
- 川村幸次郎 (昭30年卒)
- 安川 忠治 (昭32年卒)
- 東 務 (昭32年卒)
- 寺西 弘教 (昭32年卒)

- 山本 善史 (昭35年卒)
 - 安封 裕二 (昭36年卒)
 - 末定 富雄 (昭36年卒)
 - 倉西 秀数 (昭37年卒)
 - 榎屋 浩大 (昭38年卒)
 - 大杉 義則 (昭39年卒)
 - 飯沼 芳春 (昭48年卒)
 - 望月 京治 (昭51年卒)
 - 丸金 篤史 (昭52年卒)
- (敬称略)

立命化友会役員異動

(敬称略)

逝去

名誉会員

- 岡本 勇三 (昭27年卒)
- 林 暁 (昭35年着任)
- 山本 善史 (昭35年卒)

変更

学内幹事

新任

- 長澤 裕 (平27年着任)
- 松村 浩由 (平27年着任)
- 北村 佳久 (平27年着任)
- 武田 陽一 (平27年着任)
- 深尾 陽一朗 (平27年着任)
- 井之上 浩一 (平27年着任)

編集後記

この春、薬学部は二期生が卒業。今回平成二十五年卒の会員より投稿を頂き、新時代の息吹を感じました。大阪いばらきキャンパス(OIC)の開校に伴い経営学部、政策科学部が衣笠、びわこ・くさつキャンパスからそれぞれ移転しました。

本年は戦後七十年にあたり、報道機関を通じて被爆七十年、東京空襲七十年と言う文字が飛び交うなか、世界各地では、異常気象による豪雨と土砂災害、連続猛暑日、森林火災、大地震、火山爆発等が生じ地球もかなりダメージを受けています。一方「このとり」5号が国際宇宙ステーションに無事到着輝かしい成功を収めました。会員各位も夢を持ち将来の目標に向かって歩みましょう。

(金川)



二〇一五年4月供用開始となった「バイオリンク」

立命化友会 2014年度事業報告

I. 諸事業

1) 2014年3月卒業生名簿作成	2014年	6月
2) 第2回総会	2014年	7月20日
3) 同窓会設立30周年記念式典	2014年	7月20日
4) 立命化友会ニュース(第3号)発行	2014年	11月1日
5) 全会員への通信	2014年	11月
6) 在校生ソフトボール大会	2014年	11月30日
7) 卒業・修了パーティー	2015年	3月21日
8) ゴルフ懇親会の開催		
・第32回(順延分)	2014年	5月7日
・第33回	2014年	10月15日
・第34回	2015年	3月25日
9) 立命化友会ハイキングの開催		
・第28回	2014年	5月25日
・第29回	2014年	11月21日
10) 釣り天狗クラブ		
・第5回	2014年	11月9日 (雨天により中止)
11) 温泉研究会		
・第6回幹事会	2014年	6月28日
・第4回総会	2014年	11月29日

II. 諸会議

1) 幹事会		
・第1回	2014年	5月11日
・第2回	2015年	1月25日
2) 企画運営委員会	2015年	1月25日
3) 立命化友会ニュース編集委員会		
・第1回	2014年	6月29日
・第2回	2014年	9月21日
4) 同窓会設立30周年事業準備委員会		
・第4回	2013年	4月27日

立命化友会 2014年度決算

一般会計 (単位:円)		
(収入の部)	予算額	執行額
前年度繰越金	1,454,825	1,454,825
前年度繰越金	2,955,658	2,955,658
会費(学生)	3,790,000	3,790,000
寄付金	10,000	493,530
雑収入	1,000	70,270
合計	8,211,483	8,764,283 ①
(支出の部)	予算額	執行額
総会開催費	2,700,000	2,666,411
同窓会30周年事業準備費	50,000	22,352
事業等補助金	300,000	49,000
地域別活動推進費	250,000	0
会議費	200,000	176,089
印刷費	800,000	552,906
郵送費	1,000,000	648,262
人件費	1,000,000	937,638
事務局費	250,000	63,058
雑費	50,000	0
拠出金(連絡協議会へ)	180,000	180,000
在学生活動援助費	360,000	360,000
振込み手数料	10,000	5,076
予備費	962,008	0
合計	8,112,008	5,660,792 ②
収入支出差引残額 (①-②)		3,103,491
応化会基金		
(収入の部)	予算額	執行額
繰越金	3,831,119	3,831,119
合計	3,831,119	3,831,119 ③
(支出の部)	予算額	執行額
30周年記念事業用記念品	3,831,119	1,533,060
合計	3,831,119	1,533,060 ④
収入支出差引残額 (③-④)		2,298,059

立命化友会 2015年度事業計画

I. 諸事業

1) 2015年3月卒業生名簿作成	2015年	6月
2) 立命化友会ニュース(第4号)発行	2015年	11月
3) 全会員への通信	2015年	11月
4) 在校生ソフトボール大会	2015年	11月
5) 卒業・修了パーティー	2016年	3月22日
6) ゴルフ懇親会の開催		
・第35回	2015年	10月28日
7) 立命化友会ハイキングの開催		
・第30回	2015年	4月26日
・第31回	2015年	10月25日
8) 釣り天狗クラブ		
・第5回	2015年	4月5日
・第6回	2015年	11月22日
9) 温泉研究会		
・第7回幹事会	2015年	4月23日
・臨時幹事会	2015年	9月5日
・第5回総会	2015年	10月17-18日
10) 特別企画セミナー	2016年	2月28日

II. 諸会議

1) 幹事会		
・第1回	2015年	6月28日
・第2回	2016年	2月28日
2) 企画運営委員会	2015年	6月28日
3) 立命化友会ニュース編集委員会		
・第1回	2015年	6月29日
・第2回	2015年	9月21日

III. 支部活動

(関東支部、東海支部、中国・四国支部) 未定

立命化友会 2015年度予算

一般会計 (単位:円)	
(収入の部)	予算額
前年度繰越金	3,103,491
会費(学生)	4,100,000
寄付金	10,000
雑収入	1,000
合計	7,214,491
(支出の部)	予算額
事業等補助金	300,000
地域別活動推進費	250,000
会議費	150,000
印刷費	800,000
郵送費	1,600,000
人件費	1,000,000
事務局費	300,000
雑費	50,000
拠出金(連絡協議会へ)	200,000
在学生活動援助費	360,000
振込み手数料	10,000
予備費	2,194,491
合計	7,214,491
応化会基金	
残額	2,298,059
合計	2,298,059